

活字文化をひらく—文化通信社

The Bunka News

2025年(令和7年)

4月22日

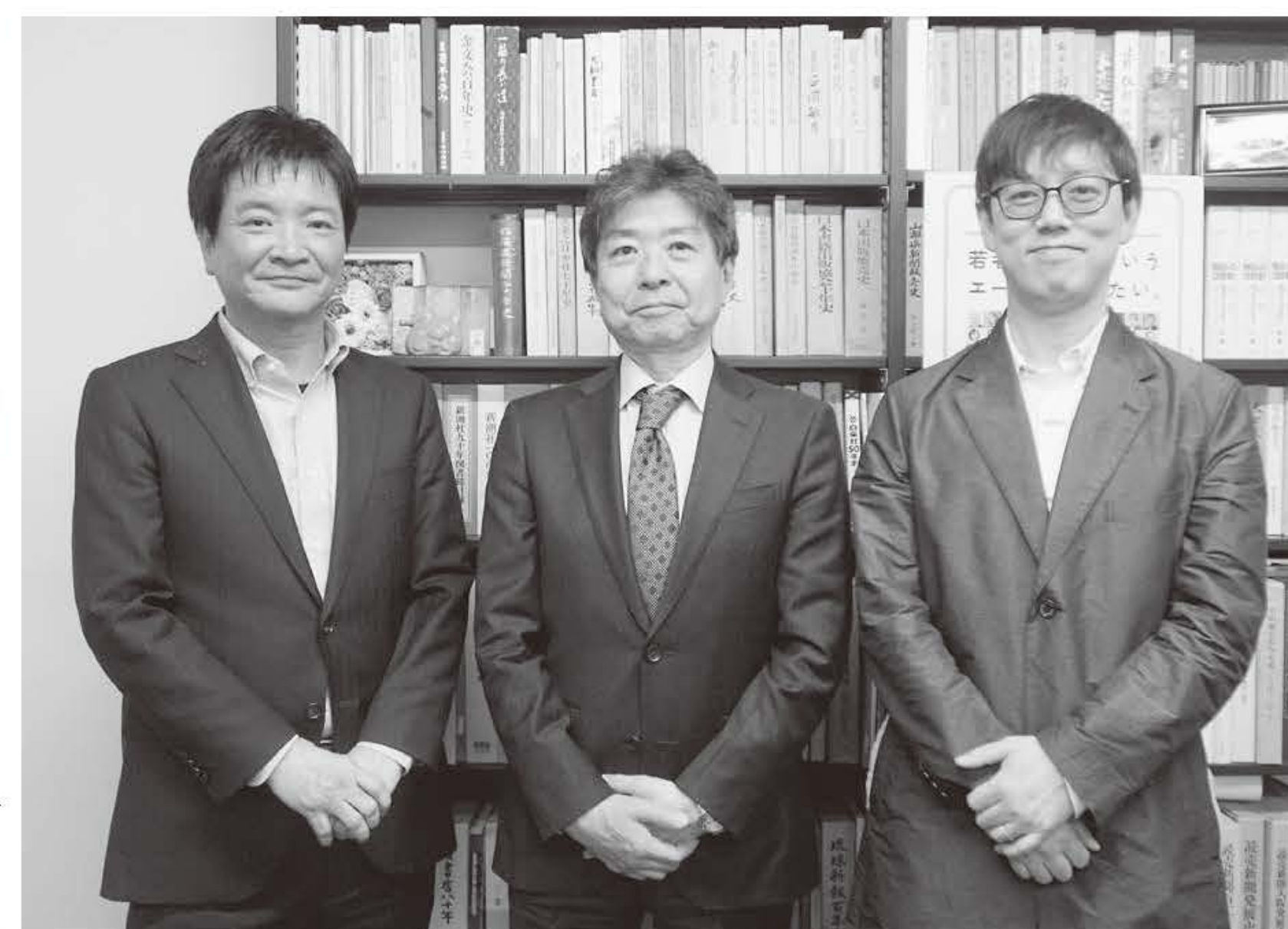
火曜日

RFID タグ普及元年へ

導入決めた中堅出版社3社社長が座談会

出版物へのRFIDタグ装着が中堅出版社に広がり始めている。一迅社、白泉社、日本文芸社はPubtEXが提供するRFIDタグの導入を決定し、書籍トレーサビリティシステム「BOOKTRAIL」に参画することを発表した。一迅社は2月から新刊コミックスに装着済みで、白泉社は4月発売以降の新刊コミックスから、日本文芸社は今夏までには開始する見込み。また、秋田書店も開始時期は未定だが前向きに検討中だという。RFIDタグは個品ごとの流通を可視化し書店の棚卸作業の軽減、万引き防止効果、さらにこれまでできなかった紙出版物販売への活用之道を開きつつある。一迅社の野内雅宏社長、白泉社の高木靖文社長、日本文芸社の竹村響社長にRFIDタグへの期待、これからのコミック市場、書店との協業の方向性を語ってもらった。

(司会) 星野渉・構成) 成相裕幸

一迅社・野内雅宏社長
白泉社・高木靖文社長
日本文芸社・竹村 響社長

左から高木社長、野内社長、竹村社長

ともに装着を開始する。弊社でもRFIDタグの導入を検討しています。RFIDタグはしおり型です。

竹村 日本文芸社の場合、装着に際しては印刷所の対応も必要になってしまっていますので、6月から7月あたりをめどに始める予定でいます。

年間数千万円

負担は覚悟

RFIDタグの装着は費用がかかります。コスト増に直結しますが、それだけ費用をかけてやる理由は、野内 当然価値高にはなります。ただ、RFIDタグの方が大きいだろうと最終的に判断しました。導入のメリットは適正配本につながっていくことです。書店さん側からすると万引きの防止や棚卸作業が格段に早くなります。出版社の部の精度が上がりますし、返品減

(6面に続く)

春の活字文化応援特集

実装・運用に高まる期待

今回の座談会に出席いただいただけでもすごいですか。

一迅社、白泉社、日本文芸社は、野内 一迅社は基本的にコミックRFIDタグを導入済み、またを主体にRFIDタグの装着をします。RFIDタグの導入を決定しています。親会社である講談社は今後導入することを決定しています。各社さんの現状をお話しいからの要請もありますが、メリッ

トが大きいとの判断からです。先も装着しています。タグはしおり型です。

高木 費用負担は、年間で数千万円レベルにはなると覚悟しています。タグ費用は会計上原価扱いになるので、1冊1冊の収益にも影響が出てきます。ただ、書店、版元、読者全てに多くのメリットがあります。その代わり多くの版元や書店が参加しない限り、そのメリットを享受できません。拡充するほどメリットも倍増します。加えて今IoT時代に置いて行かれないように紙の本が新たに舵をきるべきだと思いい決断しました。

